

「おらほ弁で語っぺし」プロジェクトの報告

大野真男¹・小島聡子²・竹田晃子³

地域方言を次世代に残していくためには、方言そのものを博物学者のように調査・収集して残す記録保存のみでは効果がない。①研究成果ではなく学習材として活用可能な方言資料の作成、②標準語教育や全国共通語化により形成された方言に対する消極的態度の転換支援、③学校教育と連携した方言使用場面の保持・生成、などの継承保存のためのポジティブ・アクションが必要になってくる。

本発表では、2013年度以降、文化庁「被災地の方言活性化支援事業」として継続的に取り組んできた「おらほ弁で語っぺし」プロジェクトから、釜石市と宮古市田老で試行した方言教育活動に絞り込んで報告する。

1. 釜石で昔話を方言で語る「漁火の会」と連携した活動

釜石市は南部藩領と伊達藩領にまたがる地域であり、言語的には市内水産業地域の浜言葉、農林業地域の甲子弁、宮古・大槌に連なる北前弁、遠野の影響の強い橋野弁、伊達藩領のケセン弁などに加えて、かつての主産業であった製鉄所に東北各地から集まった人たちの製鉄所弁など、実に多様な地理的・社会的背景をもって地域のことばが形成されてきた。その一方で、他の東北地方の諸地域と同様に全国共通語化が極めて進んでおり、若年層の方言ネイティブは希少な状況である。

①地域に眠っている資料を活用した方言学習材の作成

方言研究者は、対象方言の先行研究・関連資料を包括的に把握しており、それらを学術の立場を離れて地域方言の保存・継承のために活用することが可能な立場にあり、支援者としての役割を果たすことが期待される。釜石市には現在、市民が手軽に閲覧できる方言集が存在しない。そこで、過去の眠っている地域の方言資料、具体的には昭和天津波直後の郷土教育運動の一環として岩手県内各地の小学校で編纂された方言資料を活用した学習材の作成を試行した。

郷土教育運動とは、昭和初期の世界大恐慌、冷害・地震・津波などの天変地異による農村疲弊に対して、郷土愛を涵養することにより地方活性化を図ろうとする国の教育政策であった。岩手県では郷土教育運動の一環として、県内すべての尋常高等小学校で、昭和11年前後(方言のみの調査)と昭和15年(方言を含む歴史・地理・民俗・産業等の調査)に郷土調査が行われている。11年前後の調査報告は岩手県立図書館蔵分と小松代融一氏旧蔵(現・竹田晃子蔵)に分かれて現存し、15年資料は岩手県立図書館蔵である。

現・釜石市内では、橋野・栗林・鶴住居・釜石・平田・唐丹の7つの尋常高等小学校から

¹ おおの まきお(岩手大学) oono@iwate-u.ac.jp

² こじま さとこ(岩手大学) satok@iwate-u.ac.jp

³ たけだ こうこ(立命館大学) tkd8m3@post.nifty.jp

の11年前後の調査報告が存在し、加えて八重樫真道『岩手県釜石町方言誌』(昭和7年・日本民俗研究会、著者は11年前後の釜石報告者と同じ、内容重複多し)がある。これらの資料を集積して、冊子『郷土教育資料が語る昭和初期の釜石のことば一次世代に方言を伝える試み一』(作成者：竹田晃子・2015年3月)を作成し、併せて、冊子に掲載されている身体方言語彙に関する授業を釜石市立栗林小学校で試行した。(写真：鶴住居白濱資料・授業風景)



②地域の方言活動家との連携による方言に対する消極的態度の転換

方言が次世代に継承される絶好の培地として昔話等を語る活動に注目し、方言で地域の昔話を語る団体(釜石市「漁火の会」等)と連携した活動、釜石弁を語る事業「おらほ弁で昔話を語っぺし 南部弁サミット in 釜石」(イベント)を、市教育委員会とも共催して2014年以降継続して開催した。漁火の会による語りを通じて、地域の言葉で日常生活を送ることの楽しさ、方言が自分たちの心情を最も忠実に反映できる言葉であること、様々な社会的場面で地域の連帯的感情を表現できる言葉であること等について、地域の方々に理解を深めていただき、方言が次世代に継承されるべく従来の社会的認識の改善を目的とした。



また、他地域において同様の活動に取り組む方言活動家と連帯するために、文化庁支援事業「発信! 方言の魅力 語るびや語るべし青森県の方言」(代表：弘前学院大学・今村かほる)とも連携して八戸・津軽の語り部たちとの交流を図った。(写真：ポスター・会場風景)



③学校教育と連携した方言使用場面の保持・生成

現在の学習指導要領では、学校教育では「国語科」の中で方言を直接扱うことができない。ただし、「総合的学習」等の時間であればある程度可能なので、「おらほ弁で語っぺし・小学校編」として、釜石市内の小学校・学童クラブなどにおいて「漁火の会」と連携して子ども達に方言のシャワーを浴びせる、つまり地元の方言に親しませる活動を展開してきた。三陸沿岸部の子ども達は、自分からは方言を喋ることはできないが、まわりの高齢者たちが使う方言を耳にする機会にはまだ恵まれている。事後のアンケートからは、子ども達自身はほとんど方言を使うことはないが、方言に対して興味を持ち、方言で語られる昔話の世界を楽しんでおり、自ら話す機会を望んでいることが明らかになった。

また、特に低学年では、従来の語り聞かせだけでは途中で飽きてしまう子どもが少なからずあるために、昔話のあらすじに関連したイラストをパワーポイントで呈示する工夫をしたところ、子ども達の聞く姿勢が大幅に改善された。伝統的な炉端での語り聞かせではなく、多くの子ども達が集まる教室での語り聞かせであるため、新しいメディアの活用は必要である。昔の小学生が作った方言昔話「かっぱ」の絵本の複製呈示も行った。(写真：スライドを使った授業風景)



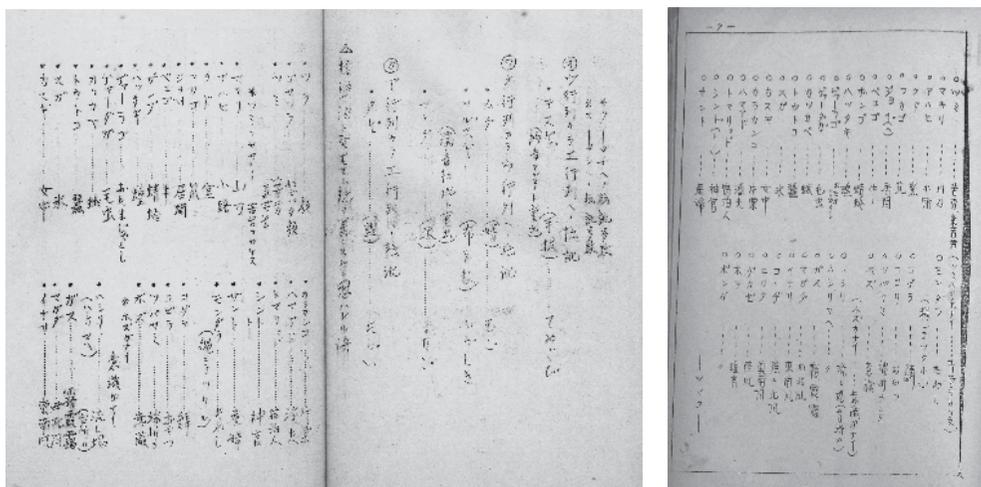
2. 宮古市田老の中学校と連携した方言劇支援活動

宮古市田老は、「津波太郎(田老)」の異名を付けられるほど古くから津波被害が多く、逆に津波防災に対する積極的姿勢を持っていることでもよく知られている。今回の震災でも激甚な被災状況となったが、宮古市立田老第一中学校で昭和津波を素材にした復興の物語「関口松太郎物語」を文化祭で公演する企画が昨年度立てられ、その脚本の田老方言訳づくりに協力した。関口松太郎氏は昭和の大津波直後の田老町長であり、被災から立ち上がるための第一歩の事業として防浪堤づくりを提案するが、困窮する村の財政状況からほとんどの村民が反対する中、子孫の繁栄のためと説得し、ついに村を挙げての事業として着手するというストーリーである。

①地域に眠っている資料を活用した方言学習材の作成

田老は水産が主産業であり、高年層は日常方言を使うことが多く、他地域に比べると若年層の方言接触は保たれているが、やはり子ども達は自分では方言を使うことができない状況である。また、田老にはまとまった方言集が存在しないため、ここでも昭和初期の郷土教育資料「田老尋常高等小学校 郷土教育資料」を中心に、その他の利用可能な資料からの情報を加えて、見出し語 989 項目から成る二種の冊子『絆のことば—田老方言の単語帳—(共通語引き・五十音順)』(65 頁)・『絆のことば—田老方言の単語帳—(方言引き・五十音順)』(69 頁)を作成し、暫定的な形で利用可能な参考資料として提供した。先々は、田老の方々によ

りこれらの冊子を増訂して、正式の田老方言集を作成することが次の目標となる。(写真：田老町郷土教育資料、昭和15年・昭和11年)



②地域の方々との連携による方言に対する消極的態度の転換

中学校の「合同津波授業」として、昭和の大津波直後の郷土教育運動と田老方言に関する大野の講話を行った。その際に、地域の古老の方々においでいただき、郷土教育資料に書かれた田老方言の対話を演じてもらった。

③方言をまじえた劇の上演

文化祭が迫ってきた状況にあって、生徒の自主的なシナリオ方言訳を一層支援するために、シナリオの方言試訳を続けて行った。地元のNPO「たちあがるぞ田老」を主宰する方の協力を得て、方言試訳版シナリオのネイティブ・チェックを行い、その結果確定した方言訳シナリオを生徒会執行部に引き渡した。

その後、生徒会執行部の生徒たちにより、共通語を残す部分と方言で演ずる部分の自主的編集が行われた結果、最終的なシナリオが確定し稽古が繰り返され、文化祭での公演が行われた。来聴者はほとんど父兄と地域の方々であり、生徒たちが自分の言葉として話す田老方言を食い入るように聞き入っていたのが印象的であった。

【参考文献】

- 大野真男・小林 隆 編(2015)『方言を伝える—3.11 東日本大震災被災地における取り組み—』ひつじ書房
- 小島聡子・竹田晃子(2014)「岩手県における郷土教育資料の概要—方言に関する記述を中心に—」(平成25年度文化庁委託事業「三陸の声を次世代に残そうプロジェクト」岩手大学)
- 須知ナヨ・大野真男・竹田晃子・小島聡子・釜石漁火の会(2016)『釜石 漁火の会 須知ナヨ昔話集—被災地の言語文化資料—』(平成27年度文化庁委託事業「おらほ弁で語っぺし展開編」岩手大学)